



## 「意味」と「動機づけ」

ロシアの文豪ドストエフスキーが自らのシベリア流刑の体験を描いた小説に「死の家の記録」という作品がある。そのなかに人間の労働について非常に深い洞察に満ちた描写が出てくる。

少し引用してみよう。

「もっとも凶悪な犯人でもふるえあがり、それを聞いただけでぞっとするような、おそろしい刑罰を加えて、二度と立ち上がれぬようにおしつぶしてやろうと思ったら、労働を徹底的に無益で無意味なものにしさえすれば、それでよい。今の監獄の苦役が囚人にとって興味がなく、退屈なものであるとしても、内容そのものは、しごととして、益も意味もある。囚人は煉瓦を焼いたり、畑を耕したり、壁を塗ったり、家を建てたりさせられているが、この労働には意味と目的がある。苦役の囚人が、どうかするとそのしごとに熱中して、もっとうまく、もっとぐあいがよく、もっとりっぱに仕上げようなどという気をさえ起こす。ところが、たとえば、水を一つの桶から他の桶に移し、またそれをもとの桶にもどすとか、砂を搗くとか、土の山を一つの場所から他の場所に移し、またそれをもとへもどすとかいう作業をさせたら、囚人はおそらく、四、五日もしたら首をくくってしまうか、あるいはたとい死んでも、こんな屈辱と苦しみからのがれたほうがましだなどと考えて、やけになって悪事の限りを尽くすかもしれない。…」(工藤精一郎訳)

こんなシリアスな状況ではないにしろ、私たちが技能者を養成する過程で、訓練生に似たようなことをさせてはいないだろうか？ つまり、彼らの将来にとって意味のないこと、あるいは意味がないと錯覚させるようなことをさせてはいないかということである。

私の施設では木造住宅を建てる建築大工技能者を養成しているが、その訓練内容は、プレカット工法の時代になっても、基本的な伝統技能の重要性は変わらないという認識のもとに、両方の技能をバランスよく習得させている。

ところが、プレカット工場を見学させたときのことである。自分たちが半日かけてやっとでき上がるような仕口、継ぎ手が、機械にかかると、あっという間にでき上がってしまう光景を目にした彼らの驚きの表情……。このとき、彼らは自分たちが習得しようとしている技能はもはや習得する意味を持たないのではないかと思ったに違いない。かくして伝統技能の習得に対する意欲は急速に醒めていった。

「プレカットといえども万能ではない、基本的な伝統技能を身に付けておかないと応用のきかないアンバランスな技能者になる」と説いても反応は鈍く、このような時期がしばらく続いた。

そして、伝統技能習得に対する意欲が再び燃え上がるときがやってきた。

それは技能五輪への挑戦である。技能五輪予選出場のチャンスを全員に与えると伝えた日から、彼らの意識は一変したのである。今は、先輩が全国大会でメダルを獲得するようになって、一層その機運は盛り上がっている。

彼らに意味あることをさせ、動機づけ、そしてチャレンジするチャンスを与える……。ドライな若者に対する処方箋が少し見えてきたような気がする。

みと	きよし	
略歴	昭和39年	岩手大学農学部林学科卒業 住友林業株式会社入社
	平成2年	PT.R.P.I現地法人副社長
	4年	住友林業建築技術専門校校長
	14年	現在に至る